

2018 年 5 月イタリア事業報告（ローマ・フィレンツェ）

はじめに

狩野 啓子

本報告書で言う「2018 年 5 月イタリア事業」とは、正式には、国際交流基金に提出した以下の事業名の略称である。

日 本 語： 久留米大学 文化財保存科学研究部会（日本文化紹介：筑後伝統工芸）
イタリア レクチャー・デモンストレーション・ワークショップ

英 語： Promoting Chikugo's Traditional Arts in Italy;
Yame Washi and Kurume Kasuri

事業内容：2018（平成 30）年 5 月 15 日にローマで、久留米大学文化財保存科学研究部会がローマ日本文化会館と共同で主催して、八女手漉き和紙・久留米絣の解説と実演を行なう。同時に八女伝統工芸館が制作した英語パネルによる展示・紹介も行ない、同年 11 月に福岡で開催される「伝統的工芸品月間国民会議全国大会」の宣伝を行なう。その後 16～18 日にフィレンツェで開催される文化財保存国際学会（Heri-Tech）に参加し、ブースでの展示と小講義室での解説を行なう。

この事業の締めくくりとして本報告書をまとめた。執筆は以下の通り、分担して行なった。

はじめに 狩野啓子（訪問団長・久留米大学名誉教授、文学部特任教授）

第 1・5 章 狩野啓子（同 上）

第 2・3 章 矢野英子（訪問団員・文化財保存科学研究部会特別研究員・
大分大学経済学部地域システム学科准教授）

第 4 章 松枝哲哉（訪問団員・藍生庵、重要無形文化財久留米絣技術保持者会会長）

松枝小夜子（訪問団員・藍生庵、重要無形文化財久留米絣技術保持者会会員）

溝田俊和（訪問団員・八女手漉き和紙 溝田和紙工房）

大場はるか（訪問団員・久留米大学文学部国際文化学科准教授）

神本秀爾（訪問団員・久留米大学文学部国際文化学科准教授）

おわりに 原口雅浩（文化財保存科学研究部会部会長・久留米大学文学部心理学科教授）

文化財保存科学研究部会のメンバーによる訪問団を結成し、2018（平成 30）年 5 月にイタリアのローマとフィレンツェにおいて、八女手漉き和紙と久留米絣の実演と解説、研究部会制作の動画放映等を実施した内容の詳細を、第 1 章以下で述べることとする。

なお、実質的な編集作業を担当した狩野啓子と矢野英子を本報告書の編者とした。狩野は、2007（平成 19）年 1 月から 2017（平成 29）年 3 月まで、研究部会長を務めた。2017 年 4 月から、その職責を原口雅浩現研究部会長に移譲した。狩野は 2018（平成 30）年 4 月に文学部特任教授に就任したが、研究部会員としての活動は継続している。今回の事業に関しては、訪問団長を務めた。矢野は久留米大学在任中、特に海外との交流を実施する際に重要な役割を担い、2017（平成 29）年 4 月に大分大学に赴任後も、本研究テーマに関する調査研究を継続して行ない、現在は研究部会の特別研究員である。

第1章 事業の実現までの経緯

狩野 啓子

1. 文化財保存科学研究部会の現在までの主な活動内容

本事業を実施した久留米大学比較文化研究所の文化財保存科学研究部会は、複数の活動を同時進行させており、関係者（部会員・特別研究員・研究協力者）は自分の技術・知識が生かせる活動を選択し、関与している。そのため、今回の事業に参加する者が深く関与した主な活動の抜粋のみ、下記に記しておく。本事業の訪問団のメンバーには下線を引いた。

- ・2007（平成 19）年 1 月：文化財保存科学研究部会設立（狩野啓子）
- ・2008（平成 20）年 5 月：文化財保存修復学会第 30 回記念大会に参加
口頭発表：「保存用記録紙として防虫効果の高いクララ和紙について」（狩野啓子、上宮健吉、堂前亮平）
ポスター発表：「化学薬剤を用いない防虫保存用品の開発」（狩野啓子、上宮健吉、宮原信孝）
- ・2013（平成 25）年 3 月 6 日：特許取得（第 5158626 号）
発明の名称：「有害生物忌避シートまたは紙状物」（発明者：狩野啓子、上宮健吉）
- ・2013（平成 25）年 10 月：経済産業省「クールジャパンの芽の発掘・連携促進事業 プロデューサー人材派遣事業」採択
プロジェクト名：「日本の伝統技術で文化財保存修復用品を創る」
（プロデューサー人材：狩野啓子、松枝哲哉、溝田俊和）

この事業の中で、国内外から多数の専門家の招聘が叶ったので、以下のような久留米大学主催の学術事業も並行して実施した。

国際文化学科特別講義

11 月 9 日「文化財修復と和紙」（講師：鈴木裕氏、杉山恵助氏）

久留米大学文学部公開講演会「筑後の藍と和紙」（全 3 回）

12 月 9 日 第 1 回 “藍をめぐって”

ジェニー・バルフォア・ポール「世界的な視野で藍を見る —エジプトのミイラからブルージーンズまで—」

（エクセター大学特別研究員、世界の藍染織についての調査・研究の第一人者。

“indigo: Egyptian Mummies to Blue Jeans” The British Museum Press 2011）

フィリップ・ジョン「純正天然藍染めとは —SPINDIGO の統括者として—」

（レディング大学名誉教授、“SPINDIGO”プロジェクトのコーディネーター）

2014 年 1 月 13 日 第 2 回 “筑後の和紙を世界に発信する”

タティアナ・ギンズバーグ「和紙を西洋に紹介する —『和紙総監』英訳に携わって—」

（和紙アーティスト。天然染色による作品も制作。『和紙総監』英訳担当）

富樫 朗 「八女和紙の特長 —各地の和紙を比較して—」

（「豊田市和紙のふるさと」学芸員。日本各地の和紙の調査研究と手漉きの技術研究を行なう。）

2 月 1 日 第 3 回 “筑後の伝統工芸を世界に広めるために”

ヨルグ・ゲスナー 「和紙に魅せられて」

(デザイナー、フランス在住)

中野 重治 「伝統工芸を世界に発信する」

(関西伝統工芸品ボランティアガイド協会会長)

山本 勉 「ロンドンで日欧交流をコーディネートする」

(JapaNeeds 代表、国際会議通訳、イギリス在住)

- ・ 2015 (平成 27) 年 3 月 15 日 久留米大学文学部講演会

河野 雅治「イタリアと日本 400 年の『遠距離恋愛』」

(日本政府代表、東京オリンピック・パラリンピック組織委員会理事。2014 年まで駐イタリア特命全権大使)

- ・ 2017 (平成 29) 年度：「ふるさと名物応援事業補助金」(経済産業省「JAPAN ブランド育成支援事業」) に狩野・神本が参画

プロジェクト名：「八女手漉き和紙の文化財保存・修復用途の欧州での普及と販路確立」(申請者：一般社団法人 ミュージアム支援者協会、代表者：代表理事 竹田仰。プロデューサー：狩野啓子)

2. 研究部会の海外での事業実績

- ・ 2009 (平成 21) 年 2 月：海外調査

大英博物館修復部平山スタジオ、バチカン図書館修復部、イタリア国立中央修復研究所など (狩野啓子、矢野英子)

- ・ 2011 (平成 23) 年 3 月：海外調査 (狩野啓子)

フランスの修復専門家マリ・クリスティン氏、イギリスの大英博物館の修復専門家杉山恵助氏と情報交換

- ・ 2013 (平成 25) 年 3 月：ロンドン・ノリッジ研修 (狩野啓子、上宮健吉、矢野英子、松枝哲哉、溝田俊和、大沼雅明)

① ノリッジ大学の和紙展 (Washi: The Art of Japanese Paper, 2013 年 3 月 12 日～4 月 20 日) に参加

② ロンドンのキュー王立植物園所蔵のパークス・コレクション (和紙) とジェニー・バルフォア・ポール氏のインディゴ染めコレクション調査

③ 大英博物館修復部平山スタジオを重点的に見学

- ・ 2014 (平成 26) 年 2 月：海外調査 *経済産業省の「クールジャパン」事業

(狩野啓子、矢野英子、松枝哲哉、溝田俊和)

イタリア国立中央文化資料図書修復保存研究所、バチカン図書館修復室における八女手漉き和紙とクララ染め保存布のプレゼンテーションと販路の可能性の調査。

この事例を含めた報告書が経済産業省のウェブサイトに掲載された。

(URL: http://www.meti.go.jp/meti_lib/report/2016fy/000165.pdf)

- ・ 2015 (平成 27) 年 3 月：海外調査・和紙のプレゼンテーション

イタリアで博物館・美術館コーディネーター・展示用品設計・制作・販売を行なっている イヴァーノ・フランカヴィラ氏 と情報交換

(URL: <http://www.ivanofrancavilla.it>)

バチカン図書館とバチカン・シークレット・アーカイブズ修復部、ミラノ・ビッコカ大学を訪問（狩野啓子）

- ・ 2016（平成 28）年 9 月：ローマ大学トル・ヴェルガータ校（狩野啓子）訪問
ゼミ研修を兼ねて、学部学生 4 名同行。学生は講演補助も担当した。
講演：「化学薬剤を用いない防虫保存用品の開発」 ＊イタリア語の通訳付き
- ・ 2017（平成 29）年 3 月：海外調査・和紙試作要請を受ける。（狩野啓子、神本秀爾）
イタリアのアマルフィの歴史文化センター訪問、紙の博物館見学
バチカン・シークレット・アーカイブズ修復所で、修復用の植物染色の手漉き和紙の試作を依頼される。
イタリア国立グラフィック研究所で版画用手漉き和紙の見本調達を依頼される。
カルメン・コラック氏の写真スタジオを訪問し、写真印刷用の手漉き和紙の調達を依頼される。
- ・ 2017（平成 29）年 11 月：海外調査・和紙のプレゼンテーション・講演（狩野啓子、矢野英子、桑野剛一）
ミラノ・ビッコカ大学、ミラノの建築家のノア工房において和紙を活用するための協議
バチカン・シークレット・アーカイブズ修復所で八女手漉き和紙のプレゼンテーション
ローマ大学サピエンツァ校で講演（桑野剛一）
イタリア国立グラフィック研究所に依頼されていた手漉き和紙を提供（狩野啓子）
イヴァーノ・フランカヴィラ氏から、来年 5 月のフィレンツェ Heri-Tech への出展を強く慫慂される。大規模な国際会議なので、修復用和紙を宣伝するにはまたとない機会である。研究部会で検討し、その結果、国際交流基金に応募することとなった。応募書類作成は、当時研究部会員であった大場はるか准教授が担当し、12 月に申請した。
- ・ 2018（平成 30）年 3 月：ローマで事前打ち合わせ（狩野啓子）
フィレンツェ Heri-Tech への出展に合わせて、ローマとフィレンツェを併せた事業を研究部会として企画し、国際交流基金に申請中であったので、ローマ日本文化会館を訪問して相談したところ、会場提供と共同主催の可能性が出てきた。正式には、4 月の採択決定を待つことになった。

3. イベント実現まで

本事業の企画にあたっては、イヴァーノ・フランカヴィラ氏（博物館コーディネーター）と意見交換し、協議を重ねてきた。さらにローマ日本文化会館の西林万寿夫館長、竹下潤副館長ともご相談ができ、その後もメールと電話で綿密な打ち合わせを続けた。また、現地職員として会館の管理・設営を担当するローマ在住の秋山信茂氏は、和紙造形作家として活躍しておられる方で、和紙の専門家としても大きなお力添えがいただけた。

研究部会は第 1 章・2. で述べたように海外の情報収集を継続的に行っており、修復専門家を中心とした旧知の方々には、メールで事業開催を通知した。共同主催が決まったローマ日本文化会館の発信力も強力であった。

財政面の支援に関しては、まず拠点である久留米大学の関連諸機関に支援を要請した。福岡県庁の商工部観光局にも相談に伺い、本事業が 2018（平成 30）年 11 月に福岡で開催される「伝統的工芸品月間国民会議全国大会」の宣伝を兼ねることを打ち合わせた。八女市、久留米市、うき

は市、筑紫野市等からの支援もお願いした。当方としては、英語パンフレットを預かり、イタリアで配布の手配をした。直接間接を問わず、多くの公的機関が協力して下さった。以上の他にも、さらに、個人や地元企業にも趣旨の理解をお願いして寄付を募った。予想以上に、多くの方々のご厚志を賜ったことは、望外の幸せであった。

寄付者ご芳名（敬称略 個人・団体の順に五十音順）

【個人のご寄付等】

お 名 前	所 属
青木 忠興	元西日本新聞久留米総局長
笠置 英明	
狩野 啓子	久留米大学文学部特任教授
酒本 喜與志	
高木 典雄	うきは市長
田中 達也	田中藍株式会社代表取締役
幡本 敏廣	
樋口 秀吉	うきは市監査委員事務局長
松枝 哲哉	藍生庵
武藤 久登	筑後地域文化誌「あげなどげな」編集長
山下 美知子	筑紫野市婦人会
匿名 2 名	

【団体のご寄付等】

団体のお名前	代表者のお名前
久留米大学文学部同窓会	同窓会長 伊藤 吉信
株式会社関家具	代表取締役 関 文彦
田中藍株式会社	代表取締役 田中 達也
筑紫野市地域婦人会	会長 萩尾 房子
株式会社筑邦銀行	代表取締役 佐藤 清一郎
社会医療法人天神会（新古賀病院）	病院長 林 明宏／理事長 古賀 伸彦
株式会社馬場市助商店	代表取締役 馬場 弘市
八女市	八女市長 三田村 統之
*あしたの会	会長 吉村 皓子

*「あしたの会」からご寄付のお申し出をいただいたが、締め切り後だったため、協議の上 2019 年度の文化財研究部会の出版費用に使用させていただくことになった。感謝してここに付記する。

4. 具体的な準備

1) 久留米絣展示・講演のための準備

久留米絣の松枝哲哉、小夜子ご夫妻が揃って参加して下さることになった。ローマでは、これまで和紙の販路拡大プロモーション中心に動いてきたが、今回の事業は筑後の伝統工芸の紹介であり、久留米絣もイタリアの方々に紹介を待たれている重要な伝統工芸である。数多くの精密な部品からなる久留米絣の織機は、現実的にはイタリアに持ち込むことが難しい。ローマでは、久留米絣の実物を披露してその素晴らしさを理解してもらおうと考えた。

久留米絣の反物と着物は、容量や重さを考えると、あらかじめ送っておいた方が好都合ではある。しかし、その作品の価値を考えると、万一の事態に備えて、自分たちの手で持っていく方が安全であるという結論に落ち着いた。そのために、各自が大型のスーツケースを準備し、分担して重い荷物を運ぶことになった。

2) 八女手漉き和紙製作実演・解説のための準備

八女和紙に関しては溝田俊和氏が紙漉き（流し漉き）を実演する。そのための設備、道具を必要とする。

i) 楮（こうぞ）を水に溶かした和紙の原料を貯めるための“漉き舟”と呼ばれる大きな水槽

ii) 紙を漉くための簀桁（すげた。簀とそれを支える木枠）

漉き舟の中で簀桁を揺らし、紙を漉く。その時に、相当の重量が生じる。職人への負担を軽減するために、数本束ねた竹のしなが利用される。この竹も、地元で産出する真竹を用いてきた。簀桁は天井に架けられた竹の束に紐で吊り下げられ、その竹がバネの役割をする“つる”という道具は紙漉きに欠かせない。

iii) 八女の溝田和紙工房にある漉き舟と“つる”は、人が立って作業するスペースも含めると、3畳の部屋を天井まで使うほどの大きさとなり、これをイタリアに持ちこむには、解体して運んだとしても相当な運送料がかかりそうだった。

道具や物の輸送に関しては国際交流基金から“カルネ¹”と呼ばれる方法を助言された。当初の予算では、この紙漉きの道具・設備一式の送料が大きな部分を占めていた。

しかし、この点は、計画が進み、秋山信茂氏とやりとりをするうちに、変更されることになる。秋山氏がイタリアでの紙漉き実演のためにローマで自作した漉き舟と簀、その一式などかなりのものを借用できることになり、これらを使って実演することに溝田氏も同意し、送る荷物が大幅に変更された。

一つ、大変重要な和紙製作の原材料として、日本産の「楮」が必要であった。これは、完全に乾かした物であれば、イタリアに持ち込めるため、溝田氏が手荷物で持っていくことになった。

¹輸出入の申告にあたって税関に提出する書類。ATAカルネは、通関手続きにおいて税関に提出する用紙からなり、この用紙を、輸出入の申告書／物品の明細書として、税関は取り扱う。税関は、記載事項と物品の内容をチェックした上で、許可のスタンプを押す。ATAカルネは、外国への輸入通関手続きの際に、輸入税の担保書類としての働きをする。物品の一時持ち込みの場合には、輸入税相当額の担保金を預けるよう税関が指示することもある。物品を現地で売却したり、贈与すると、通常の輸入と同じ扱いになり、この担保金が没収され輸入税の支払いに充当される。（盗難、紛失のため当該カルネの物品を持ち出せなかった場合も同様。）しかし、ATAカルネを使用すれば、外国税関に対してその場で輸入税を支払ったり担保金を預けたりする必要はなくなる。（JCAA HP より転記、一部改変）

3) その他

事前に送ったものは以下の通りである。

- i) 今回のイタリア事業に協賛して下さった八女市が、福岡県の助成を受けて作成した八女地方の伝統工芸品のポスター（英語版 A2 版、一部福岡県の助成を受けて制作。現在八女伝統工芸館 2 階に掲示）17 枚。これらを展示に使わせていただくことになっていた。秋山氏が現地でのポスター仕上げを引き受けてくださり、事前にデータのみを送り、私たちがローマに着いた時には、美しいポスターが出来上がっていた。
- ii) 久留米絣製品（藍生庵製の着物等）
- iii) イタリアで久留米絣の着物を着用するための和装小物等
- iv) 解説で紹介したり、また展示に使用したりする和紙（溝田俊和氏・松尾久弘氏制作）、和傘（吉田崇氏制作）、和紙提灯（伊藤権次郎商店製）、久留米絣の小物（藍生庵製）、藍染めクララ染めの風呂敷（八女クララハイジの会制作）等
- v) 学生が作成した久留米絣と八女和紙のカード。松枝氏提供の久留米絣の小さな切れ端を溝田氏提供の八女和紙のカードにあしらい、英語説明文を添付した記念品として来場者に配布した。
- vi) 関係者への記念品として、研究部会が購入保管していた北斎版画カード（ユニパークス製）
- vii) 福岡県、久留米市、八女市、うきは市、大刀洗町等から配布を依頼された英語パンフレット

授業や仕事の合間に準備を進めていくうちに日程が迫り、梱包、発送できたのは直前のことであった。

1. 到着後前日まで



福岡空港にて出発を待つ

5月12日（土）早朝、八女を出発した溝田氏の車に松枝夫妻、大場、神本が同乗、太宰府から狩野、矢野が福岡国際空港に向かい合流、仁川経由でローマに向かった。

松枝夫妻は久留米緋の着物、藍染の作務衣上下に藍と白の刺し子を施した袖無羽織を身につけての旅。福岡空港でも仁川空港でも、他の利用客の目を引いた。11時間の飛行時間の後、ローマには、現地時間19時30分到着。手配してあった大型タクシー²で宿舎であるローマ市内のヴィラ・アンジェリーナ (Villa Angelina) に向かった。このヴィラ・

アンジェリーナは、もともと聖マリア修道女会の修道院で、ヨーロッパではよくあるように修道院の一部を宿泊施設に改装したものである。私たちのプロジェクトにここ5年ほど関わっているイヴァーノ・フランカヴィラ (Ivano Francavilla) 氏がその内装と収集品（聖遺品）の展示に携わっており、前回の訪伊の際に中を見せていただき、紹介されていた。この宿は今回7人が滞在するにあたり、研究会の目的にふさわしく、華美でなく、しかし心温まる安全な滞在を保証してくれた。修道院の方が、特別に館内を案内してくださり、フランカヴィラ氏が設計、施工した聖遺品の展示室もを見せていただき、イタリアに脈々と続いてきたキリスト教文化の一端を感じる経験もできた。



ヴィラ・アンジェリーナの談話スペースでミーティング

翌日、時差や旅の疲れをものともせず、早速、訪問団は、ローマ日本文化会館の下見に向かった。ローマ日本文化会館は、すぐ近くにローマ大学建築学部キャンパスや国立近代美術館がある閑静な文教地区にある。当日は日曜日で休館日なので中に入れないことはわかっていたが、日本文化会館の場所と外観の確認をして、一同少し安心し、実感が湧いてきた。



ローマ日本文化会館の前で

月曜日に、準備を整え、改めて日本文化会館に正式訪問し、団員全員が西林万寿夫館長、竹下潤副館長、鶴井百合奈事務局長、秋山信茂氏と挨拶を交わした後、早速準備に取りかかった。日本から前もって送った荷物はすでに到着しており（これまでの準備については、第1章参照）手分けして開梱し、会場となる2階の講堂へ持ち込んだ。

²旧知のタクシー会社に依頼した。駅の混雑や、時間のロス避けられ、荷物も安全に運べる。複数人で移動する際は、何より安全で、しかもかかる費用も安く済む。

2 階には温かい印象の木材を内装に生かした立派な講堂（200 平方メートル）がある。

会場には 100 脚ほどの椅子が整然と並び、秋山氏の漉き舟一式がすでに持ち込まれていた。聴衆の視界を遮らないよう、また、聴衆が動いて実演を見られるように、実演を行なう溝田氏が漉き舟一式を部屋の中央後ろ寄りに置くことを決定し、数人で、移動させて設置準備を始めた。



2 階講堂

一方、残りの団員は松枝夫妻の解説に向けて、ステージ上の設営を始めた。館からお借りする衣桁（いこう）と届いた荷物の中から撞木（しゅもく）を設置、手荷物で持ち込んだ松枝哲哉、小夜子両氏作の久留米絣の着物や反物をステージ上に飾った。熊本県山鹿の吉田崇氏から貸与された八女手漉き和紙を材料に使った和傘が絣を引き立て、



漉き舟の調整をする秋山氏と溝田氏

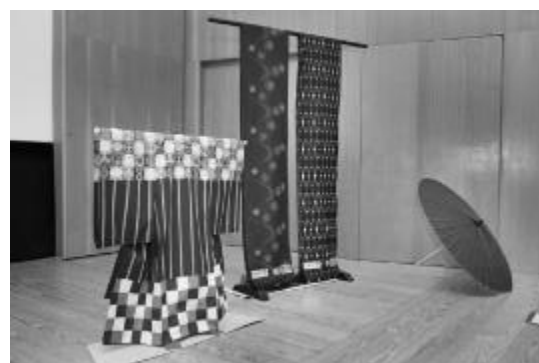
ステージは日本情緒溢れる空間となった。

会場である講堂前には階段から続く広いスペースがあり、そこには、八女市が作成した八女の伝統工芸品ポスター（17 枚）を展示する計画であった。日本文化会館ではポスターの展示用に、組み立て式のイーゼルを新たに追加準備して下さっており、メンバーで手分けして、組立、配置をした。視覚効果を考えて場所を入れ替えたり、高さを変えたり様々に展示を工夫し、いくつかを玄関前、階段下に八女和紙を使った提灯とともに飾った。

竹下副館長には、準備段階から細々とした相談に乗っていただき、荷物の受け取りや、会館全体の調整をしながら、スケジュール調整や設営に手を貸していただいた。また、秋山氏は普段からこの日本文化会館で開催される展覧会の設営・展示にも関わっておられるため、次々と手際よく助言、指示をいただいた。設営に必要な工具や道具はすべて事務室のロッカーに整然と並んで揃っており、それらのいくつかをお借りしながら、効率よく作業が進んだ。溝田氏は、簀を支える「つる（バネ）」の調整を続けていた。どうしても普段八女の自宅工房で使っているものと勝手が違うらしい。日本文化会館に、資材



竹の細工をする溝田氏と秋山氏、見守る狩野団長



ステージに展示した久留米絣の作品と和傘

としての「竹」があると知ると、それをその場で割って加工し、思うような強度、しなり具合のつるを作成する作業に没頭していた。会館の前庭で、切り出しナイフを使って、竹を削る作業をする溝田氏の周りには、ここは日本かと錯覚するような空間になっており、イタリア人警備員さんも珍しそうに眺めていた。この後、次のフィレンツェでの展示準備に一足先に現地に向かう直前のフランカヴィラ氏が作業の合間を縫って文化会館を訪れた。残って作業



食事会での交流。日本文化会館、日本大使館、日本政府観光局の方々と。挨拶する狩野団長、左にローマ日本文化会館西林館長、竹下副館長

をしていた狩野と溝田と2ヵ月ぶりの再会を喜び、フィレンツェでの展示の最終打ち合わせを簡単に行なった。

翌日の準備も整い、午後遅く、市内のレストランで、今回のローマでの解説・実演を支えてくださった日本文化会館の皆様、さらに今後の筑後地方との橋渡しをしていただける日本政府観光局（JNTO）ローマ事務所の方たち、大使館の方たちと顔合わせの会を持った。それぞれの参加者の自己紹介とともに、研究部会の紹介、翌日に控える

解説・実演の紹介をする中で、やっとお互いにじっくりと言葉をかわすことができた。これまでの準備過程でお世話になった方々に感謝の意を伝え、また重要な公機関の方々と今後の交流をお願いする好機であった。

2. 解説・実演当日

当日朝は早めに宿を出発。ゆっくりと食べる時間がなかろうという通訳の鶴巻美砂子³氏の助言に従い、途中、タクシーを停めて昼食用のサンドイッチと飲み物を購入して日本文化会館へ向かった。

この日の公演のため、部会員は殆ど全員が久留米絣の着物、あるいは久留米絣を洋服にアレンジしたものを着ることにしており、YANK'S⁴のスタッフとローマで着物の着付けをしておられる大野史子氏に着付けを依頼していた。会館に到着するや、展示の最終点検、情報交換や伝達をする中、手の空いた者から、控え室で協力者の支援を得ながら、久留米絣の着物に着替えた。また、本公演を観にきてくださる旧知のローマ在住日本人の方たちからも差し入れをいただき、食べものをつまみながら、着替えに準備にと全員が忙しく動いた。

その間にも、会館には次々と聴衆が集まってきており、階段、廊下からざわざわと人の気配がし、熱心に廊下に立てられたイーゼルのポスターに見入るイタリア人の姿がドアの隙間から見えた。この解説・実演の正式記録写真を撮ってくれるステファノ・カルレッティ氏が久留米絣に着替えた私たちの姿も順番に撮影した。

全員の着替えが済む頃には、会場内の席はほとんど埋まっていた。ローマ日本文化会館から依頼された栗原大輔氏がイタリア語通訳を務めた。栗原氏は、ローマで育ったマルチリンガルである。政府の要人や皇室の方々への通訳も務めるほどの実力者で、よどみのない流暢なイタリア語と日本語を話される。



講堂前に並べた八女伝統工芸館作成のポスター、その他英語パンフレット、和紙スタンド

³ ローマ在住の通訳・ガイド。医療通訳も行なう。ここ8年間ほど本研究部会のイタリア語通訳を依頼している。今回は、2本のDVDのイタリア語字幕原稿作成も依頼した。

⁴ 狩野団長の長女、狩野優紀氏がローマ市内で経営する美容室ヤンクス。在伊邦人、イタリア人が集まるため、ローマでの情報が集まる。ヤンクスの協力がイタリアでの研究活動を大きく支えてきた。

開会后、まず、ローマ日本文化会館館長の西林万寿夫氏のご挨拶をいただき、狩野団長による久留米大学文化財保存化学研究部会の概略および団員の紹介、また、研究部会の研究の目指すところを説明し、いよいよ久留米絣から、ビデオ上映と解説が始まった。

3. 久留米絣について



祝い着を前に解説する松枝哲哉氏と久留米絣の作品

まず、最初に研究部会が 2008 年に制作した、久留米絣の歴史、概要、制作過程を説明する DVD『藍 匂い立つ』に、今回新たにイタリア語字幕を加えたものを上映した。後述の八女和紙の DVD も同様であるが、イタリア人にとっては、これまでに見たことのない日本の映像をイタリア語字幕で見ることができ、その内容が理解できる。おそらく、極東（とヨーロッパでは呼ばれる）に位置する日本へは行ったことのない聴衆にとって、日本の、しかもテレビでよく観るような大

都会“東京”ではなく、筑後川の穏やかで緩やかな風景や美しい耳納連山、そしてその禁の藍生庵の佇まい、そこで取り組んでいる気の遠くなるような細かい作業の様子は、大変興味深いものに違いなく、観衆は食い入るように集中して観ていた。

DVD 上映に続いて、松枝哲哉氏が挨拶の後、壇上に飾ってある久留米絣の着物、反物の説明を行なった。今回の展示にあたっては数ある作品の中から、松枝夫妻にとって最も思い出のある“ご子息の誕生にまつわる”祝い着を含む 10 点余りを選んで持って来られており、それらについて、栗原氏の通訳を交えて説明した。久留米絣の人間国宝であった故松枝玉記氏の孫にあたる哲哉氏は、祖父である玉記氏の下で染め、織りの修行をされていた当時、やはり久留米絣を学びに来ていた小夜子氏と縁あって結婚された。結婚後 10 年目に子どもを授かったことを知った時に、喜びの中で観た花火をモチーフにした「夢花火」、誕生したご子息の祝い着、その他「暁（ひかり）」「爽風」「御所車」「五白十字」、など、藍と白が織りなす美しい織物一つ一つの物語に、聴衆は聞き入っていた。次に同じく久留米絣作家である小夜子氏が久留米絣の工程の説明。そして、久留米絣の特徴の一つとされる「手括り」— 綿糸を防染の過程として粗苧（あらそ・麻の紐）で括る作業



括りの作業を見せる松枝小夜子氏と説明する哲哉氏



溝田氏（中央）と解説を通訳する栗原大輔氏

を、舞台を降りて実演し、その熟練された美しい手指の動きが、周りに集まった聴衆を魅了した。

4. 八女手漉き和紙の制作過程

こちらでも、まず、研究部会作成の八女和紙の DVD『八女極薄和紙を漉く』にイタリア語字幕をつけたものを上映した。のどかな矢部川周辺の風景、伝統的な紙漉き唄が流れる映像を通して、昭和初期の紙漉きの様子や、現

在もかわらない手法で作業が進む溝田和紙工房の風景に聴衆は集中して見入っていた。溝田氏による八女和紙の歴史、制作過程の解説の後、部屋の中央で紙漉きの実演をするにあたっては、聴衆全員が、漉き舟の周りを囲んで集まり、溝田氏の一举手一投足にどよめきながら、原材料の楮（こうぞ）と“練り⁵”の白濁した溶液から和紙が漉かれる過程を見守った。溝田氏の呼びかけで、実際に漉く作業をしてみたいと申し出たイタリア人たちの中から2名が、溝田氏の助言に従って、慣れない手つきで紙を漉く体験をした。日本文化会館へ足繁く通うイタリア人たちは、元来日本最員の人が多く、聴衆はイタリア人だけでなく、ローマ近辺在住の日本人も含まれる。その中でも大学教授のご子息である日本人小学生が、漉き船のすぐ横に貼りつくようにして、溝田氏の手から紙ができる様子を見ていた姿が印象深い。



説明をする溝田氏と聴衆、説明に聞き入る少年

時間がたつのも忘れるほどの熱中ぶりで紙漉きの実演が続く一方で、ステージに展示されている久留米緋に近づき、近くでその精密な柄や染めに見入る人々、また、通訳を介して松枝夫妻に様々な質問をする人、また、糸を括る作業を見せる小夜子氏の手元をさらに近くで観察する人々も見られた。中には、ためらいがちに団員やスタッフに近付き、身につけている久留米緋を「触ってもいいか」と尋ねて、大切そうに手で触れ、感嘆の声をあげるイタリア人もあり、設定した時間は、あっという間に過ぎてしまった。

5. ローマでの解説・実演を終えて

会場では、来館者にアンケートを手渡し、イベント終了後に会場入り口近くで回収している。日本文化会館の竹下副館長が後に送ってくださったアンケート結果は、次のとおりであった。

入場者数 130 人、回答総数は 96。全体的な満足度に関しては 5 段階評価で答え、高い順に 71-18-0-0-0（未回答 7）であった。「事業がより深い日本理解の役にたったか」という問いに対しては、5 段階評価で高い順に、77-13-0-0-0（未回答 6）、「久留米緋のことを知っていたか」という問いでは「はい」と答えた人は 10、「いいえ」と答えた人は 84（未回答 2）であった。「八女和紙のことを知っていたか」という問いには、「はい」23、「いいえ」70（未回答 3）、「今後より深く知りたいか」に関しては、「久留米緋について知りたい」3、「八女和紙について知りたい」4、「両方知りたい」77であった（未回答 12）。さらに「筑後に行ってみみたいか」に対しては、「はい」88、「いいえ」3、（未回答 5）という結果だった。（アンケート内容については巻末の【参考資料】参照）

アンケートの結果により、参加者の日本の伝統工芸へ興味の深さが伺える。久留米緋、八女手漉き和紙に関しては、知らなかった人が大半であり、今後、国外にも広く知らせて行くことで、これらの伝統工芸の将来の可能性が広がることが予想される。また、この解説・実演を体験した事で、



聴衆も紙漉きに挑戦

⁵ トロアオイの根を臼でついてできる粘液。これを紙の原料を入れた漉舟の水溶液中に混ぜると、紙の原料が沈まず、簀の上で留まり、しかも、漉き上がって重ねた紙が乾いたときには、一枚一枚簡単に剥がすことができる。紙漉きの作業に欠かせない。糊に間違えられることが多いが、粘度を高める役割を果たすだけで、接着力はない。

筑後地方に来てみたいという興味を誘ったというこの結果も、地域の伝統工芸とインバウンドと結びつけて考える際の良い材料となるだろう。

ローマでの解説・実演を実際に見た人達は、筑後（日本）の伝統工芸への興味をさらに深めたと言える。そこで、この解説・実演イベントがどういう意味を持っていたかを整理してみたい。

1) 本物を見ること、手にとって触れるということ - 来館者が目にし、感じた“筑後”

人々は、まず、会館の入り口で八女工芸品のポスターに出迎えらる。中へ入ると、吊り下げられた提灯が目に入り、また別のポスターに迎えられ、階段を上る。2階講堂へ続く前室に並ぶ八女伝統工芸品の英語ポスターの数々に立ち止まって見入り、また和紙スタンドの脇に並ぶ筑後地方に関わる英語パンフレットを手にする。興味深く眺めている中に、展示用に持ち込んだ久留米絣の図版（日本語）が欲しいという美術大生もいた。また、アンケートを提出した人には、久留米大学の学生が研究部会員とともに作成した小さな記念品 - 八女手漉き和紙に久留米絣の切れ端をアレンジしたカードに、英語説明文を添えて差し上げて、喜ばれた。

そして、何よりも、久留米絣の制作者、八女手漉き和紙の制作者の生の話を聞き、その技術を目の前で見られるのである。手先を見つめる目、静まり返って、出来上がってくる作品を待っている会場



松枝小夜子氏の指導を受け、記念品を製作する学生たち。久留米大学ラーニングコモンズにて

の熱気。実演が始まると、間近で制作者

たちの手元を見たいと寄ってきて、本物を自分の目で見ようとするイタリア人聴衆やイタリア在住の日本人たちの熱い想いが伝わってきた。本物の伝統工芸の制作者とその技術に対する敬意が強く感じられた。

会場で団員が実際に久留米絣を着用していたのも、より多くの人たちに間近で絣を見てもらえるという点で大変よかったと思う。何人ものイタリア人たちが直接触ってもいいかと聞いてきた。

本物の久留米絣、紙漉きの技術を目にし、その作品である本物の絣、和紙を手にとった人たちは、その場で強い印象を感じている。

触れられるほどの距離で本物を見せること。実際に手にとって触ってみられることの大切さ。それが、ローマでの解説・実演の持つ「意

味」だったと思われる。

2) イタリア人と日本の伝統工芸

伝統工芸の制作者とともにヨーロッパを訪れ、実際に実演してもらう構想は、研究部会発足以来狩野団長が育ててきた夢でもあった。予想通り「百聞は一見にしかず」、ヨーロッパ人に、美しい日本の工芸品を生み出す職人技は、海も文化を超えて大きな感動・インパクトを与えたと言える。特に、イタリアは、紀元前からの長い歴史と文化を持つ美術大国であり、イタリア人が持つ職人、マエストロの技術、受け継がれる伝統に対する敬意と愛情は深い。それは、何度もイタリアを訪れ、フランカヴィラ氏はもちろん、何人



階下に展示する提灯やポスターに見入る人たち。右は説明する通訳の鶴巻美砂子氏



説明する哲哉氏と近づいて小夜子氏の手元に見入る人たち

もの美術関係者をはじめとするイタリアの人たちと接していて学んだことである。どちらの国も古くからの伝統工芸、それを伝える職人への尊敬の眼差しを持つことから、日本の伝統工芸の魅力を伝えるには、長い歴史と伝統を持つ“イタリア”は正しい選択だったと言えるだろう。

ただし、フランカヴィラ氏は、「その伝統も時代とともに消えて行きつつある」と危惧している。氏は研究部会の仲介で2度来日し、筑後地区はもちろん、東京、福岡、湯布院でも多くの伝統工芸品やそれに携わる人々に接した。日本の伝統工芸の技術を残すための後継者問題、受け入れ伝承していく文化の問題に、イタリアとの共通点を見出している。「だから、自分も人間が培って来た伝統工芸を大切に守る努力をしたい」と述べる。これが、フランカヴィラ氏が、日本の九州で“日本の伝統工芸を守る”研究活動を10年以上継続してきた文化財保存科学研究会に共感し、気長に支援してくれる所以なのだ。

3) アピールしたい相手に伝わることを主眼に—仲介言語と宣伝媒体

フランカヴィラ氏は「イタリアでの宣伝広報は自分のやり方に任せてほしい」と主張する。全くその通りで、イタリア人の感性に響くポスター、イタリア人の顧客に気質に合わせた宣伝方法、伝えたい相手に伝わる方法こそが最善である。今回、ローマでの解説・実演に際し、ローマ日本文化会館でもHPにイベントのお知らせを載せたり、ポスター、チラシを作成するなど、広報をしていただいたことが大変ありがたかった。

また、これまで研究部会が久留米餅、八女手漉き和紙のDVDを記録用として作成していたこと、また、今回は予算を投じてその既製のDVDにイタリア語字幕をつけて持参したことは、予想以上に効果的であった。日



ローマ日本文化会館前にて。後列左より二人目から、竹下潤副館長、秋山信茂氏

本人の立場から考えると、イタリア人はイギリスと同じヨーロッパにあり、英語が十分通じるはずだろうと予測する。しかし、実は、イタリアで英語が堪能な人は観光業界やごく一部で、英語を敬遠するイタリア人が思いのほか多い。日本語は勿論さらに遠い言語となるが、むしろ、日本人の方が英語に対する複雑な苦手意識があるため、却って英語を理解しようとする人は多いかもしれない。英語での解説だけでなく、イタリア語字幕付きのDVDは、一瞬にしてイタリア人の心を掴んだ。

4) インバウンドへの繋がり

ローマでの解説・実演を実際に見た人たちは、日本の伝統工芸への興味をさらに深めた。イベント後にとったアンケートによると、実際に筑後地域を訪れてみたい、という答えが96人中88人もいたことには団員も驚いた。実際に本物を見せる、触れるということが、引き起こす化学反応は大きい。日本政府観光局ローマ事務所の職員の方々も、この解説・実演を見に来てくださり、事務所には福岡県、八女市、久留米市、うきは市、大刀洗町の英語パンフレットもお願いして置いて来た。この解説・実演を見た人たちは、いつか将来、筑後地方に来てくれるように思う。少なくともそのきっかけとなる種子を撒いてきた。2018年12月、松枝夫妻の藍生庵にELLE Italy編集部から記者が訪れ、「ELLE Italy 12月号 web版」に写真付き記事が配信されたのは、その成果の第一歩といえるだろう。

第3章 フィレンツェでの展示・解説

矢野 英子

1. 準備について

1) 到着まで

ローマでの解説・実演が終わるや、翌朝にはローマのテルミニ駅からフィレンツェに向かう特急に乗車した。トスカーナ地方の葡萄畑を車窓に見ながら、1時間半ほどでフィレンツェに到着する。世界遺産・美の都フィレンツェの駅舎の外観は、厳しい景観基準にも合わせてあるためか、驚くほど地味である。

ホテルは、通訳の鶴巻氏の手配でフィレンツェの駅から歩いて5分ほどの通りに取ってあった。チェックインし、それぞれの部屋に荷物を置いた後、取って返して駅の方に戻り、学会会場へ向かった。

フィレンツェでは、文化財保存国際学会（Heri-Tech）で、修復紙としての八女手漉き和紙と、保存布としての久留米絣（藍染め・クララ染め）、資料保存箱について、ブース展示および、解説を行なうことになっていた。Heri-Tech が開催される会場は、Firenze Fiera Congress and Exhibition Center、メディチ家につながるルネサンス期の建物を含む3カ所の隣り合わせた大きな会議施設の一部で、フィレンツェ駅のすぐ側に位置する。もともと

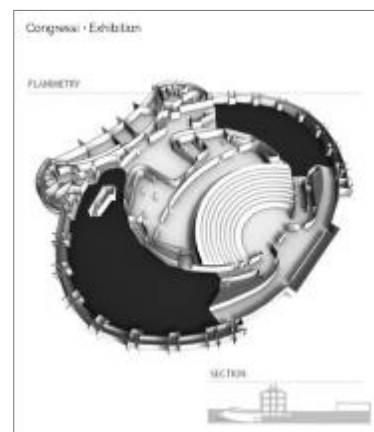


Firenze Fiera Congress and Exhibition Center 中庭にて

と19世紀の貴族の別邸であった建物を改装し、国際学術会議を開ける施設にしたものである。受付がある建物を抜ければ、高い木々に囲まれた大きな中庭に出る。国際色を表す十数国の国旗が立てられ、バーやレストランのある建物を通り過ると、今回のイベントのため、新鮮なトスカーナ地方の食材を使った様々なスナックを売る屋台になる中型車も数台停まって営業している。散策スペースである中庭を抜けると正面に会場となる時代を感じさせられる外観の本館が現れる。さりげなくオブジェを擁した入口を入ると、今回は文化財修復学会であるため、修復に関する古書や美術書のブースが出ている。1、2階にはワークショップが行なわれる小講義室が並ぶ。そこを抜けると大講堂（auditorium）とそれを囲む吹き抜けの展示空間がある。そこは1区画4平米ほどのブースに区切られており、どこも忙しそうに設営準備をしている。私たちのブースは、今回初めて、フランカヴィラ氏の会社にかかなりの部分を委託して本格的に準備してもらった。

2) イヴァーノ・フランカヴィラ氏

第2章でも述べたが、今回の修復学会への参加は、フランカヴィラ氏から積極的に提案されたものだった。2014年に紹介された当初、私達は、フランカヴィラ氏は紙を取り扱う業者だと認識



展示会場図 Heri-Tech HP より



ローマ国立東洋美術博物館にてフランカヴィラ氏を初めて紹介される（2014年2月）

していた。しかし、それだけではなく、氏は博物館コーディネーターとして、伝統絵画や彫刻、美術品の保存・展示を手がける総合デザイン事務所（Ditta Ivano Francavilla、以下フランカヴィラ社）を経営しており、デザイナーや技術者など数人のスタッフで内容に応じたチームを構築して仕事を分担している。ダヴィンチの習作を始めとする美術品の展示のための額縁や修復用の機材など、自身も制作にも当たるが、本格的な木工や施工の技術者の片腕もいる。フランカヴィラ氏はなによりまず、伝統工芸品の（修復）保存への情熱が熱く、

工芸品を制作する職人やその作品への深い敬意、そしていかにして貴重な文化遺産を良い形で後世に残すかという使命感の実現が彼の本質である。イタリアのドイツ寄りで生まれ育ったため、むしろドイツ人氣質が強く、綿密で精緻な計画をもとにコツコツと美術館や修復師たちのもとを訪れ、仕事のネットワークを築いてきている。知り合ってから5年間の仕事範囲の拡大とその内容の発展も著しい。

それらの仕事の中で、修復用和紙の品質にも敏感に気に止めてきたことから、2014年、イタリア研修の折にイタリア国立東洋美術博物館の館長と元修復師によって私たち研究グループに引き合わされた。研究会の活動や八女和紙について聞いて興味を持ってくれたのである。フランカヴィラ氏の性格、そして年に1、2回という会える頻度のこともあり、私たち研究部員との関係は、ゆっくり、慎重に築き上げられてきた。フランカヴィラ氏はイタリア語、ドイツ語を話す、英語は普段使う言語ではない。私たちとはお互いの言葉の壁を、通訳の協力と、同じものを大切に思う共感とで乗り越えながら、信頼を育ててきた。フランカヴィラ氏は、イタリア国内の修復師たちと仕事を通じてつながりがあり、また、バチカンの機密文書館をはじめ、ほとんどの部署、イタリアの主要な美術館にも出入りしており、回った先の美術館や、アーカイブを所蔵する博物館などで八女手漉き和紙の紹介も慎重に行なってくれた。そうして、5年が経ち、狩野部会長の



九州湯布院民芸村を訪ねて（2017年7月）

の退職という節目を目の前に、長年求めてきたゴールでもある大きなイベント、修復の専門家が集まる会場での八女手漉き和紙と久留米餅の展示紹介と解説のチャンス。フランカヴィラ氏がフィレンツェでのこのイベントに参加するように強く勧めてきたのは、絶妙なタイミングであった。

3) フィレンツェで筑後の修復保存用品紹介

Heri-Tech は、これまで各地で数年に一度開催されていたイタリア中心の国際修復学会であるが、“文化遺産の修復保存に活用するテクノロジー”というまさに産学連携の修復に関する国際見本市を



Heri-Tech 主催者ら（左）、Firenze Fiera の所有者（右から2番目）、イタリア修復協会の会長（右）らと。最終日ガラパーティ会場にて

融合させた画期的な国際イベントだった。気が遠くなるほどの量の歴史的文化遺産、美術品を保有し、それらの修復の機会が他とは比較にならないほど多い国イタリア。さらにその中心とも言えるフィレンツェで、イタリアだけでなく今回は世界に対象を広げての開催であった。主催者も、主な参加者たちもイタリアの美術、修復の関係者であり、フランカヴィラ氏にとっては旧知の人々もいる。イタリア、いや世界から修復に関する人たちが集まってくるこの国際学会・見本市において、フランカヴィラ氏が仲介する「八女手漉き和紙」の制作者と学術協力者と地元イタリアの修復関係者が会う機会を持たせるのは、フランカヴィラ氏自身にとっても私たちにとっても大きな意味のあることだと判断したのである。これまで本研究部会の意図に協力しようと努力してくれたフランカヴィラ氏のそういう意図が手に取るようにわかるため、私たちもあえてこの事業―イベントに挑戦してみたいと考えた。

4) 困難を乗り越えて

このイベントへの参加にはいくつものハードルがあった。i) 学期中であったため、大学の研究員メンバーには講義や業務の調整が必要だったこと。参加する八女手漉き和紙、久留米緋の制作者達にとっては、10 日あまり、制作の手を止めての渡伊となる。ii) フィレンツェで、国際修復学会と国際見本市が同時進行で同じ会場に進む形のイベント、また参加の立場や方法も選択肢があり、本部会がどういう形で参加するのかを把握し決定するのに時間がかかったこと。iii) 参加の仕方によって違ってくる参加費、ブースの設置にも備品の借用や製作などに費用がかかり、かなりの資金準備が必要なこと。加えて、団員の渡航滞在のサポートも必要なこと。（後にここには、寄付をお願いして回るという大きな責任も発生した）もちろん、iv) 初めての参加であること。v) 通常の研究・指導の合間にこなさなければならなかった申請書類作成、応募に関わる煩雑な業務もあった。これらのことを相談しようにも、イタリア国内だけでなく、フランス、南米を行き来するフランカヴィラ氏との連絡がとりにくかったことも挙げられる。これまで何度ものイタリアでの研究調査、またフランカヴィラ氏との 5 年をかけてのローマと久留米での交流によって培った信頼関係がなければ、実現するはずもなかった。フィレンツェでの国際修復学会と国際見本市への参加は、ローマでの伝統工芸品の制作実演とともに、研究部会がずっと描いて来た一つのゴールでもあったので、ハードルが高くとも挑戦する意義はあると誰もが確信していた。これらの中でも、iii) の資金に関しては、第 1 章でも述べているように、国際交流基金の助成、また、ご理解、ご賛同いただいた皆様からのご支援が実現を可能にしてくださったことをここで、改めて心より感謝申し上げたい。



小講義室の受付の様子

2. 展示・解説について

フィレンツェでの展示のテーマは“文化遺産と修復に関する技術”の紹介であったため、極薄紙をはじめとする八女手漉き和紙を中心に、研究会が長年取り組んできた天然藍やクララで染めた風呂敷や紙を中心に、和紙製品や、久留米緋の反物や小物を考えた。そして、フランカヴィラ氏の会社と共同運営という形を取った。私たちは日本の学術研究グループであるため、現場で用意する大きな展示物や、展示のための設備はイタリアでフランカヴィラ氏に頼らざるを得なかった。

そこで、ブースの看板や展示方法、貸し出される調度品の借り出し、イタリア顧客向けのパンフレットなどの作成をすべてフランカヴィラ氏に任せた。後は、実際に展示する品々を私たちが持っていく。当日、久留米から携えて来た展示物を持ってブースにたどりついた私たちを見て、フランカヴィラ氏はホッとしたように見えた。



展示ブースの様子。訪問者の対応に追われる

フィレンツェでの展示のテーマは“文化遺産と修復に関する技術”の紹介であったため、極薄紙をはじめとする八女手漉き和紙を中心に、研究会が長年取り組んできた天然藍やクララで染めた風呂敷や紙を中心に、和紙製品や、久留米緋の反物や小物を考えた。そして、フランカヴィラ氏の会社と共同運営という形を取った。私たちは日本の学術研究グループであるため、現場で用意する大きな展示物や、展示のための設備はイタリアでフランカヴィラ氏に頼らざるを得なかった。そこで、ブースの看板や展示方法、貸

し出される調度品の借り出し、イタリア顧客向けのパンフレットなどの作成をすべてフランカヴィラ氏に任せた。後は、実際に展示する品々を私たちが持っていく。当日、久留米から携えて来た展示物を持ってブースにたどりついた私たちを見て、フランカヴィラ氏はホッとしたように見えた。

まず、受付用のカウンター。くれぐれも貴重品はカウンターの上に出したままにしないこと、持ち物は、必ず奥に設置した蓋つきの専用の箱の中に入れること、展示物にも細心の注意を払うようにフランカヴィラ氏から指示を受けた。これも、文化の違いである。氏にとっては、日本でしかも九州でのびやかに暮らしている私たちが心配だったに違いなく、きちんと貴重品の管理場所まで準備されていた。ブースの正面には伝統工芸品を見せるためのガラスの展示ケースが置いてあった。中には、久留米緋の小物や反物、藍染めクララ染め風呂敷、和紙製品などを並べた（これらも、ケースの中に収められているので、安全である）。マガジンラック様の棚には、フランカヴィラ氏が作成したイタリア語版の八女手漉き和紙に関するパンフレット、その他、チラシなどを展示した。入り口近くには訪問者と談話したり、品物について説明ができる高い丸テーブルを配した。フランカヴィラ氏がイタリア人のギャラリーの目を意識して作成した久留米緋と八女手漉き和紙のポスター（巻末の【参考資料】参照）。また、光源付きの和紙展示用パネルは、背部に設置した灯が和紙全体を透かして、その繊維の様子と薄さを効果的に強調する、まさにフラン



準備が整った展示ブース

クヴィラ氏の本領発揮の展示用意匠であった。3日間、ブースは、フランカヴィラ氏ともう2人ずつの訪問団員が交代で訪問者に対応することになり、午前午後と担当者を割り振った。通訳の鶴巻氏は、ほとんどの時間、待機して下さった。担当でない時間は他の展示を見て回ったり、修復についての講義、発表やワークショップを覗いたりする機会があり、興味深く見てまわった。ブース展示は、例えば、隣のブースはフレスコ画の材料を展示し、他には、モザイク専門の材料を展示するブース、美術館で見る名画を模写する修復学生たちのブース、古いクラシックカーを修復するための塗料のブース、ナポリ考古学博物館は、地下1階の中央に基本のブースの10倍ほ

どの広い区画にパネルを駆使した大掛かりな展示を行っており、訪問者には博物館のパンフレットとともに博物館グッズを惜しげもなく配布していた。日本からは、私たちともう1団体、横浜美術大学が、フィレンツェにあるパラッツォ・スピネリ芸術修復学院と提携して開講する修復コースプログラムを紹介するブースを設置しており、訪れていた学長や関係者と挨拶して、情報交換をすることができた。

発表会場である大講堂では、美術館の名画の修復の中で新たに現れた背景からの発見についての検証や、イタリア国内の遺跡の発掘グループの発表などが見られた。



大講堂での研究発表の一例



ブース展示の一つ。修復の実演をする学生たち

3日間を通して、私たちのブースにはたくさんの来訪者があった。前もってフランカヴィラ氏から紹介され、楽しみにして訪れた人々もあり、修復に関係する業者や学生は、日本から持ち込んだ本物の和紙や藍製品を手にとって熱心に質問をしたり、持ち込んだ日本語の文献の入手方法を聞いたりし、それに、イタリア語、英語、ドイツ語で対応した。こうして、実物を目にする、実際に手に取って触れること、そして、会話のやり取りの中で疑問点を明らかにしながらモノについて理解を深めること、これがイタリアでの八女手漉き和紙流通の可能性につながると確信した時間だった。フランカヴィラ氏が、この修復学会のブース展示に参加するように強く提言してくれた理由を、身をもって実感できた。

学会最後は、小講義室での久留米絰と八女手漉き和紙の解説。最終時間枠だったため、前の発表の時間がずれ込み、また、イタリアらしく予定の時間にきっかりと終わりたいため、片付けはせかされるというかなり厳しい時間制限があった。その中で、久留米絰や八女和紙に興味を持つ人たちが参加してくれ、熱心に話を聞いていた。短い時間の中、松枝夫妻、溝田氏とも苦心して、しかし、いつものようにそれぞれの作品、制作過程について、見事にわかりやすく説明し、通訳の鶴巻氏がイタリア語に訳した。



小講義室での解説

3. フィレンツェでの展示・解説を終えて

初めてプロの力を借りてのフィレンツェでのブース出展、参加であった。今回の経験から得たもの、考えたことをここで述べたい。

1) コーディネーター・ファシリテーターとして

日本の伝統工芸などの文化を、外の世界に伝えたい時に、いかに伝えるかは、いくら工夫しても足りない。優れた伝統工芸を存続させるためには、広く多くの人たちに伝えることも大切で

ある。優れた作品や、制作者の技を直に見せる、今回のような実演は大変重要だろう。それを可能にするには、計画し、実行に移し、紹介する様々な専門家を擁するプロジェクトと、全体の動きを調整するファシリテーターが必要だと考える。作品やその素材、制作過程を研究する科学者や、時流にあった様々な広報手段や方法を知る専門家、多くの人々に実際に見せる広報の専門家などが協力する。それをうまく進めるためには、目的に合わせて調整し、コーディネートする役割、ファシリテーターが必要だろう。これまで文化財保存科学研究部会が行なってきた研究活動、普及活動は、学際研究であるだけでなく、まさにこのファシリテーターとしての役割を果たしてきているように思う。2013年のクールジャパン事業もその活動の一例だ



フランカヴィラ氏を迎えて宮内庁書陵部へ（2018年3月）

と言えるが、今回のイタリアでの事業も、本研究部会が「知の拠点としての大学」が地域の伝統工芸の紹介とその発展を内外で広めるための活動として、地域から抜け出た外の世界との様々な接触をコーディネートする役割を果たしてきた事例になると考える。これまで部会が携わってきた研究の役割は、伝統工芸の立場から見れば“ファシリテーター”であろう。伝統工芸を広く宣伝し、伝統文化を守る手伝いをする。そのために喜んで私たちの時間と労力を費やしてきた。



フランカヴィラ氏と狩野部会長 サローネの屋上で

それは、フランカヴィラ氏も同じだった。何よりイタリアの修復現場での和紙の重要性を追求し、大切な文化財を修復し、長く後世のために保存するために、またその作業に情熱を注ぐ修復師たちのために、より品質の良い和紙を求めていた。私たちの「八女和紙」をもっとよく知るために、フランカヴィラ氏は忙しい中スケジュールを縫って、日本への招待にも応じ、和紙の制作現場を熱心に見学していったし、染色や日本の伝統工芸の周辺文化についても熱心に学ぼうとしてきた。まだ知られていない、しかし品質の良い八女和紙をイタリアの修復の世界へ紹介しようと、イタリアでのニーズを慎重に見極め、イタリア人の顧客にあった

紹介の仕方を熟慮して、方策を立てて来た。

筑後（日本）、イタリアの両方でのコーディネーター、ファシリテーターとして、これら二者がいたことが、今回のイベントの実現を可能にしたと自負している。伝統工芸の新たな販路を海外で開拓するにあたり、製作現場と需要の現場を結ぶファシリテーター、コーディネーターが果たす重要な役割が、この5年間で見えてきた。

2) 今後のビジネス展開について

フランカヴィラ氏が研究者であったなら、それでよかったが、フランカヴィラ氏は、会社を運営し、社会でそのステイタスを築いている途上である。知り合ってから以来、仕事の規模も範囲も驚くほど発展を見せている。一方、私たちの基本は学術的研究であり、提供できる利益といえ、役立ててもらえる研究成果である。そして、この研究は、その最終目的でもあった伝統工芸の販路を開き、主な動きは、ビジネスのファシリテーターの手へと移って行く。フランカヴィラ社を通じて八女手漉き和紙を、イタリアを始めとするヨーロッパに輸出していくことになるだろう。フランカヴィラ氏と私たちが共有した“伝統工芸、文化財保存への熱意と誠意”。今後のやり取り、特

にビジネスに移行する面においては、もっとも円滑に効率的にコミュニケーションできるイタリア語、日本語の通訳を通し、これまで築き上げた信頼関係を温めながら、八女手漉き和紙、筑後地方の伝統工芸の発展のために、その宣伝、販売の促進を進めていってほしいものである。



フランカヴィラ社の仕事 同社 HP より

第4章 訪問団員の報告

1. イタリア（ローマとフィレンツェ）に於ける「筑後の工芸」久留米絣の活動報告

重要無形文化財久留米絣技術保持者会会長

全国重要無形文化財保持団体協議会理事

（公社）日本工芸会 西部支部副幹事長

松枝 哲哉



2018年5月15日にローマ日本文化会館に於いて、「筑後の工芸」久留米絣を紹介した。会場では、関心を寄せていただき、初めて目にする染織品であるとの生の声を聞き、染織の特殊な36の工程技法で制作する久留米絣（重要無形文化財技術）は、市場に出る機会は希少であることを改めて認識した。

絣文化の発祥は、インドであり、インドネシアを経由して14、5世紀に琉球に伝わり、日本各地で発展したといわれる。久留米絣は寛政12年（1800年）頃、13～14歳の少女・井上传（1788～1869）の織りで、染めは紺屋・佐助が担当し、絣つくりのための道具制作は田中久重の協力を得て、創意工夫が重ねられて考案されたと記される。水天宮内の石碑・碑文によれば、お伝絣の代表的な柄は「雪降（ゆきふり）」「霰織（あられおり）」と記される。その後、伝が40歳の頃には弟子は400人に及ぶ。産業を興した女性としても讃えられる一方、天保10年（1839）に絵台という道具を考案した大塚太蔵は絵画絣を考案、文字や絵絣が可能となり、絵柄は自由自在に展開する。藩の殖産興業策もあり、久留米絣の名は広まる。大塚太蔵の流れを汲む松枝家は、明治元年に建て替えられて、西南戦争後、明治15年頃より一家で生業として、久留米絣に取り組む。ローマ日本文化会館での久留米絣のレクチャーと絣の展示資料は、着用着物を含めて8点を持参した。重要無形文化財の作品2点と日本伝統工芸展入選作品2点。我が子（崇弘）の出生の祝い着物（宮参り着）を展示することで、子どもの健やかな成長を願う着物制作の経緯と、生後31日目に神様に生誕を報告する伝統行事があることを解説した。筑後地方は京都、金沢に次ぐ日本では3番目に伝統工芸が盛んな地域である。その筑後の八女に大藤の花が咲く藤山がある。観光と

しても多くの人々を魅了する藤の花をスケッチし、制作した日本伝統工芸展入選作品「爽風」を展示。筑後への愛を久留米絣に籠める。

また、よこ糸の束を長く伸ばし、両サイドで引っ張っていただき、絵模様が書かれた絵糸を添えながら、墨付きのところを括るという、よこ糸の絣括りを実演した。先に括った糸を藍に浸け染めて解くことで、白い絣が出てくることを説明し、その括る手作業を近くで御覧いただいた。より分かり易くするためには、資料や道具がさらに必要であったと感じ入る。着物の形体をじっくりと観ていただき、反物が着物の形になることを理解されたようだ。絣つくりのプロセスを丁寧に説明し、物語が理解されることで、互いの国の文化を尊重し、認め合い、様々に発展の可能性があることを認識した。作品展示に加えて、自ら着用して久留米絣を解説することで、イタリアの皆様にご理解いただき、レクチャー後に皆様の拍手からの拍手を戴き、「これだけの展示は1日ではもったいない」という意見があったことは大変喜ばしく、光栄である。今後、機会を得ることができれば、重要無形文化財久留米絣技術保持者会、保存会展が実現できることを願うものでもある。

国指定重要無形文化財保持団体は「越後上布」「結城紬」「和紙」と順にその技法はユネスコの無形文化遺産として登録される。「久留米絣」の登録も待たれるが、広く「久留米絣」といわれるものの中に動力織機絣や経済産業省の伝統的工芸品や文化庁の重要無形文化財久留米絣技術保持者の文化財など棲み分けなく枝別れした「久留米絣」と総称されるために誤解を生み易い。それぞれに認め合いながらも私たちは、手仕事の重要無形文化財久留米絣技術を保持して発展させる務めがある。自らの二つの手による工芸、技を大切に伝承しながらも、その技法に時間がかかるために生産は僅かで、採算がとれず、経済が回っていかないというジレンマに直面しつつも、保持していく道が閉ざされないように対処せねばならない。文化財の手技の研鑽をしつつ技術保持を基調として、保持者会の皆さんと生き残りを図っていかねばならない。重要無形文化財久留米絣技術保持者会に、久留米絣全体にも前向きなオリエンテーションが期待され、日が昇ることを願ってやまない。

5月17日～18日には、フィレンツェ・サローネでの文化財保存修復国際学会が開催される中で、ウルバンホールとサロنبースでは、これまでの防虫効果の調査研究「藍」の協力者としてレクチャーした。また、イタリア語字幕付きの久留米絣の記録映像を上映した。



フィレンツェのウルバンホールにて

フランカヴィラ氏が設置したサロنبースを訪れた方から、日本の人間国宝制度や文化財の保護法について、日本は文化を大切にすることに優れているとの意見があり、保持団体としての団体指定久留米絣は、いくつもの手を大切に育て、伝承していることや、今後の課題をお伝えした。ブースには、八女手漉き和紙とともに八女で栽培されたクララハイジの会の（苦参）クララ染風呂敷と私方の藍染の保存用風呂敷と文化財作品の展示をした。クララの防虫に関心を持つ研究者には、研究部会の研究協力者である近藤早苗さんから頂いたハンカチを実験試料として提供した。

日本古来の仏教の紺紙に書かれている貴重な「紺地金泥経」は、藍と和紙が長期保存に耐えていたことの証でもあり、古代より衣類の藍染めは糸や布地を丈夫にし、虫除けや抗菌の効用の伝承があったことを説明する。藍の葉による染めは、約1300年前からすでに始まり、日本の蓼藍に

よる染めは鎌倉、室町時代には確立された染色法であるといわれている。いかに神秘的に美しい色相を作り出すものか、藍染めは古代より途絶えることなく伝承されている。傍らで科学解明をされ、さらに天然染料が見直されている日本の現況と、その魅力を世界へ発信、お伝えしたいと考えている。薬（すくも）は、徳島の阿波藍・新居修（にいおさむ）氏の新居製藍所のもので、先々代から変わることなく愛用している。「薬を作る人がいる。薬に生かされる私たちがある」僅かながら、田主丸と大木町の工房では、息子とともに藍栽培をして収穫した藍の葉で、実験的に薬作りをしてきた。化学染料とは違い、天然藍は生き物、「生命体」であることをお話できる日も近い。

久留米大学医学部・桑野剛一教授におかれては、『重要無形文化財久留米絣 50 年誌』にご研究の成果をご執筆いただいた経緯がある。また、大沼雅明准教授により、我が家の藍のDNAを解析していただいた。今後の研究はさらに続き、期待されるものである。生物学の可能性としても今もそれぞれに展開されている。

フィレンツェは、職人の町であることから心と居心地のよさに安心感を覚える。シンボルのサンタマリア・デル・フィオーレ大聖堂ドゥオーモの完成までに 64 年が費やされても一人の死者を出すこともなかったという。石の重みで、積み上げられた曲線は美しく安定している。青みどりに白のラインは印象的で、建造物や街並みなど、広範に機能的にデザインするイタリア人から、多くの学びを得ることができ、大変有意義で、今後の制作に活用するものとなった。フィレンツェのハムやチーズづくりの職人と話す機会を得て、絣 1 着作るのに何日かかるかと聞かれて、3 ヶ月と答えると首を傾げながら大きなため息をつき、日本人はなんと忍耐強く手間暇かかる仕事ができるのかと、感じ入ったようで、やさしい対応をされた。改めて、工芸は生活を豊かにし、人間のものづくり学習は心を育て、役立つ学問としても成り立つこともお伝えしたい。

今回の事業は、様々な課題を考える機会を得られた。生産する作り手を育てることや、高水準の制作のみが持つ魅力をアピールする大切さ、妥当価格の設定や価値を高めることは、経済を生む魅力の要因でもある。そこでの信頼関係をつくり上げる大切さを忘れてはならない。

答えは一つではない。久留米絣は「単なる布」ではないからである。これは文化である。文化を纏うという感覚は、誇りや歴史や物語を纏うということでもある。祭りの法被や締込み姿も誇れる祭り着で、きもの文化と同じく日本の民族衣装としての価値観が生れる。

工芸とは、人と人を繋ぎ、また同時に文化を包括している。文化と経済を繋ぐことで、得られるものが、どのような展開の可能性があり、発展が期待されるかと、今後の課題は山積みである。模索は続けられる。

11 年前に久留米大学文学部・狩野啓子教授の比較文化研究所、文化財保存科学研究部会が発足して、研究協力者として夫婦で参会したことで、当初の医学部の桑野剛一教授、上宮健吉准教授、大沼雅明准教授、矢野英子准教授との連携と八女手漉き和紙の溝田俊和氏、八女のクララ生産者の近藤早苗氏や塚本ちえ子氏、クララハイジの会の皆様の協力での中に「古文書の防虫」のために藍やクララの染織など、様々な実験に加わり協力させていただいた。大変重要な文書、歴史をひも解く地域に残さねばならない資料、個人の家々に残したい指定のない我が家の文化財などを虫やカビから守りたいという一心であった。当時の九州国立博物館館長三輪嘉六氏や博物館科学課長であった本田光子氏（現九州国立博物館名誉館員、放送大学客員教授）との出会いからも、多くの人脈によって、皇居書陵部の防虫防カビの設備見学などもさせていただいた経緯がある。

また、前イタリア大使の河野雅治氏や多くの得難い方々との交流によって、学び多い時を共有させていただいたことに感謝するものである。

この度の「筑後の工芸」を紹介する取り組みを支えて下さいましたローマ日本文化会館の西林万寿夫館長はじめ副館長 竹下潤様、事務局長 鶴井百合奈様、秋山信茂様、デザイナーのイヴァーノ氏、通訳の鶴巻美砂子様、栗原大輔様、ヤンクスの皆さん、久留米大学の狩野啓子先生はじめ桑野剛一先生、大沼雅明先生、矢野英子先生、大場はるか准教授、神本秀爾准教授、統轄の原口雅浩先生、産学間事業にご尽力いただきました久留米大学様、ご支援と助成をいただきました久留米市、八女市、うきは市、田中藍様、関家具様、心寄せていただきました 多くの皆様に 心より深謝申し上げます。

松枝 哲哉、松枝 小夜子

2. ローマでの解説・実演とフィレンツェの展示・解説に参加して

八女手漉き和紙 溝田和紙工房

溝田 俊和

海外での紙漉きの実演は、K プロジェクトに携わるようになってからの和紙制作者と研究部会共通の目標でした。それが、イタリア、ローマで実現できた事は個人的にも大変嬉しく思います。ご協力頂いた企業、および個人の方々また、大学関係者の方へまずは、心よりお礼申し上げます。

今回ローマでの実演は、自分にとって何が出来て何が出来ないのか、想像もつきませんでした。行けば何とかなるだろうと思うだけでした。狩野先生から、日本文化会館には、道具もあり和紙作家の方も居ると聞いていたので、少し安心していました。実際に行ってみると、自分達が普段使っている 2×3 判の簀桁はありましたが、それを使って紙を漉くシステムではなく、バネの強度が弱く、漉き舟は簡易のもので、ちょっとビックリしました。とりあえずバネの強度だけでも上げれば、後は何とかなるかと思い、たまたまあった竹を削り、バネを作り変える作業から始めました。（右上の写真は、大工仕事、バネを作り変えているところです。）この作業に 4 時間近くかかったと思います。これができれば、紙漉き舟の設置、紙漉きの練習となるのですが、私達紙漉き職人は、バネが変わるとそれに慣れるまでかなりの時間の練習が必要です。慣れないバネでは、水がうまく流れません、それでは流し漉きの紙が出来ない事になります。（中の写真は、ローマの簀桁で練習しているところ。）30 分くらい練習を行ない、だいたいのコツがわかり、ほとんど腕で支えて漉く事にしました。これは、とても重たかった。

また、日本文化会館では、八女市からお借りした八女地方の伝統工芸を紹介する英語ポスターの展示、ご協力頂いた市町村のパンフレットの展示、配布をする事で、インバウンドを狙った企画も行なって来ました。この展示には、多くのイタリアの方々に興味持って見て頂きました。やはりこれは、英語、イタリア語への翻訳が効果をもたらしたものだと思います。

次はいよいよ実演となります。日本文化会館は決して広いところではないのですが、そこへ、大勢の日本へ興味を持っている方々に、来て頂きました。イタリアは、日本ブームだとは聞いていましたが、それを実感しました。



紙漉きをしている時に受けた質問は、「『練り』は何のために入れるのか?」「紙床(しと)」を見て、「くっつかないのか?」等の、日本人からもよく聞かれる質問で、面白かったです。疑問はどこも同じなのです。

実演を済ませ、次に向かったのは、フィレンツェの修復学会。学会の講演を聞いてもイタリア語なので、わかりませんでしたが、久留米大学のブースへは続々と修復関係者が訪ねてきました。修復には、和紙は欠かせない物となっています。しかし、今回、和紙を出展しているところは他に無く、注目を集めたようです。和紙を何の修理に使うかと尋ねると、意外なことに、石、鉄製品の修復にも使うそうです。しかし、イタリアで修復をやっている日本人の方のお話を聞いたところ、イタリアは残念ながら、経済状態が悪く、修復の仕事がとても少ないのが現実だそうです。

以前イタリアへ久留米大学研究部会のメンバーと研修に行った際、修復の現場で見せてもらった“*Washi*”と呼ばれるものが、ほとんどが機械漉きの紙で、産地も原料も分からない物が多く、これでは「日本の手漉き和紙」の認識が誤ったものになってしまう、と不安を感じました。

今回、実演を兼ねて色々な事を伝えることが出来たのではないのでしょうか、

また海外で実演できることを願っています。そして、また、これを機にヨーロッパと日本のインバンウド、アウトバウンドが進む事を願っています。



3. イタリア訪問を終えて

大場 はるか（記録、写真動画撮影、英語・ドイツ語通訳）

2018年5月12日から20日までイタリアのローマとフィレンツェに渡航し、八女手漉き和紙のデモンストレーションと久留米絣のプレゼンテーションに協力することになった。前年度の冬から狩野啓子教授を中心として企画を始め、展示物の輸送方法や関係者の渡航経路の決定、先方との日程調整など、さまざまな業務に追われた。しかし、国際交流基金からの支援が内定したのは2018年4月であったため、最終的な詰めの作業は内定後に急ピッチで進めなければならなかった。その結果、物品の輸送に関する計画のところではさまざまな変更を余儀なくされることになった。それにもかかわらず、手漉き和紙の職人である溝田俊和氏、久留米絣の職人である松枝哲哉・小夜子氏には大変柔軟に対応していただき、予定通りにローマでのデモンストレーションとプレゼンテーションと、フィレンツェでのブース展示を計画通りに実施することが可能になった。この場を借りて心より感謝申し上げたい。特に松枝ご夫妻には、重要文化財に認定されている絣の反物を海外に持ち出すにあたり、専門家ではない私などには想像できないような気遣いをしていただいていたのではないだろうか。

いずれにせよ、今回の企画では日本の伝統文化を海外に紹介する際にどれだけ多くの複雑なハードルがあるのかを実体験することができた。日本政府は近年インバウンドの拡大を狙っているが、そのためには日本のことを海外の人々にもっとよく知ってもらう必要がある。そのためにも、もう少し海外で伝統文化を紹介するプロセスが容易にできないものかと思わざるを得なかった。

今回は催しの実施のみならず、その準備過程でさまざまな問題に出くわしたこと、また、それらの問題に取り組み続けたこと自体が大変貴重な体験になったと思う。上記の職人さんの他、ローマの日本文化会館の方々にも今回は様々なところで多大なご尽力をいただいた。特にイタリアで和紙の制作プロセスを紹介した経験をお持ちの秋山信茂氏には、手漉きの技法をイタリア人にわかりやすく示すために、細かい部分に関する助言・支援をしていただいた。専門的なことは私には全くわからないが、秋山氏が手漉きの実演のため、日本文化会館の入口のフロアで溝田氏と相談しながら道具類の強度などを微調整していく様子は、大変印象深いものであった。

ローマの日本文化会館での催しは、大変盛況であった。舞台上に絣の着物・反物に加え、和傘を飾ったのが非常に効果的であったと思う。芸術品の雰囲気が出されている着物・反物に和傘が加わったことで、伝統文化の「展示」を超えて、日本の文化的な「生活」が感じられるような舞台になったように思われる。さらに手漉き和紙のデモンストレーションと、絣および手漉き和紙の制作過程に関するDVDの上映が加わったことで、伝統文化の「現在」を観客に伝えられることができたのではないだろうか。主催者側がほぼ全員絣の着物を着ていたのも効果的であった。色合いは派手ではないが、絣の文様に大変な多様性あることに観客も気がつくことができたのではないだろうか。会場の入り口に立てかけられた八女伝統工芸館のパネルも非常に良かったと思う。これらのパネルによって、久留米絣や八女手漉き和紙以外にもさまざまな伝統文化が筑後地域に残されていることが、イタリアの方々に理解してもらえたのではないかと思う。パネルをイーゼルに立てかけるという日本文化会館の提案も素晴らしかった。

ローマでの催しを終え、怒涛のごとく会場の片付けを終えた後、我々の一行は翌日にフィレンツェの文化財保存国際学会（Heri-Tech）へと向かった。こちらではブースをひとつ用意し、

修復紙としての八女手漉き和紙の展示をメインにしつつ、虫よけ効果のある藍染めやクララ染めの紹介も行なった。ブースの設営にあたっては、狩野教授がイタリアの専門家イヴァーノ・フランカヴィラ氏にコンサルタントをお願いしていた。学会への参加登録やブースの申し込み等のところでは、我々はイタリア語の通訳をご専門にされている鶴巻美砂子氏に頼りきっていたが、現地でフランカヴィラ氏にお会いしたところ、彼が英語のみならず、私が得意とするドイツ語も流暢にお話されることが判明したため、準備のところで鶴巻氏にフランカヴィラ氏との仲介・調整を過剰をお願いしてしまったことを少々申し訳なく思った。鶴巻氏を通さず、直接イヴァーノ氏と連絡を取った方が早急に処理できたことも多々あったのではないかと、その方が鶴巻氏の負担も軽減できたのではないかと、少し反省している。

いずれにせよ、ブースの展示も上首尾に終わることができた。ドイツ人の修復関連の専門家も数名ではあるがブースを訪れてくれた。その際は私がドイツ語で対応を補佐することになった。訪問者の中には、ローマで和紙を使って文化財の修復にあたっている専門家のドイツ人女性が一名含まれていた。彼女が溝田氏の提供した和紙の見本を見て、「まさに昨日ローマで修復作業をやったのだけれど、なかなか適当な色合いの良い紙がなくて…。この紙が昨日あればよかったのに！」と残念そうに何度もおっしゃっていたのが大変印象的であった。それと同時

に、ブースに展示したようなさまざまな色合いや質感の修復紙が、実際にイタリアの専門家に必要とされていることも実感でき、大変勉強になった。修復の専門家の他にも、博物館や美術館の環境を整える仕事に携わっている方が何名も我々のブースを訪れてくれた。例えば、展示ケースの湿度を調整する機械を販売している方などである。文化財に関わっているさまざまな仕事の人がフィレンツェの学会を訪れ、この場で情報交換を行なっていることが実感でき、貴重な体験となった。

今回の渡航においては、日曜日に空き時間がいくらか確保でき、ローマにあるバチカン美術館も訪れることができた。古代ローマやルネサンス関連の遺跡に加え、キリスト教関連の遺産も多く残されているイタリアとバチカンには、文化を大事にする精神性があるが、バチカン美術館を訪れることによってその一端を垣間見ることができたように思われる。機械ではなく人の手を使って直接物を生み出すことの大切さは、イタリアではこのような文化遺産が伝えているところが大きいのではないだろうか。イタリアの奥深い文化的・歴史的バックグラウンドが、八女手漉き和紙や久留米絨など、制作に手間がかかる海外の手作りの品物に人々が現代でも関心を持ち続ける土壌を培っているように思われた。3Dプリンターなどで多くの品物が一瞬でコピーできるようになった現代、機械で衣服や紙が容易に大量に生産できるようになった現代では、人間は自分ひとりの創造性の小ささに無力感を感じてしまうことがある。そんな現代においては、手を使って生み出された品々の素晴らしさを実感できる機会を持つことが特に重要であるように思われる。というのも、そのような機会に恵まれることによって人々が自信を取り戻したり、人間の可能性を改めて実感できたりするように思われるからである。プリミティブな営みによって生み出された東洋・西洋の究極の芸術品に触れたことで、今回のイタリア旅行は私にとっては「人間とは何か」を考えさせられるような旅になった。



フィレンツェで準備の合間に

4. 会場設営を担当して

神本 秀爾（会場設営責任者、英語通訳）

会場設営者として、ローマ日本文化会館（5/13～15）、Heri-Tech 会場（5/16～18）を主に担当した。

英語通訳としては、Heri-Tech 会場（5/16～18）の Kurume University & Ivano Francavilla 名義のブースでの英語話者対応を主に担当した。以下に、各日の具体的な内容を簡潔に記す。

5/13（2 日目）日本文化会館

資材搬入

5/14（3 日目）日本文化会館

動線の確認、椅子の設置

実演準備

5/15（4 日目）日本文化会館（本番）

八女伝統工芸館の英語パネル展示用のパネルスタンド（イーゼル）の設置

久留米絣の着物や小物、作品などのステージ上での展示準備

展示品の撤収、会場の原状復帰



5/16（5 日目）Heri-Tech

午前中移動、ブースの設営、ブース展示準備（八女手漉き和紙と久留米絣の動画、八女手漉き和紙の修復紙、藍染めクララ染めの保存布、桐製資料保存箱）、訪問者対応（英語）

5/17（6 日目）Heri-Tech

訪問者対応（英語）



5/18（7日目）Heri-Tech

訪問者対応（英語）、展示品の撤収、会場の原状復帰

* 5/12, 5/19-20 は移動日

<所感など>

現地の関係者（前半はローマ日本文化会館スタッフ、後半はイヴァーノ・フランカヴィラ氏）とは、本事業実施以前からの継続的なコミュニケーションを取ることができていたため、会場の設営から当日の運営、撤収にかかる一連の流れは、非常にスムーズであった。

第5章 帰国後の報告会について

狩野 啓子

1. 第1回報告会（2018年6月2日）

最初の報告会は、久留米大学御井キャンパス学生会館3階ミーティングルームで行なった。

この日の報告会にサプライズ参加して下さった野田国義氏（現参議院議員）は、2006年に研究部会設立前のプレ事業として八女伝統工芸館で会合を持った際に、当時の八女市長として出席して下さったご縁がある。また、朝日新聞の市川記者が参加取材して下さり、後日記事として掲載された。学外からの参加者も多かった。



2. 第2回報告会（2018年7月7日）

第2回目の報告会は、八女伝統工芸館に会場を提供していただき、八女和紙を焦点として報告を行なう予定であったが、集中豪雨の影響で予断を許さない状況であった。当日の朝、実施を決定したが、福岡市等から来られる予定の方々と、交通事情のため参加がかなわない方が続出した。

「平成30年7月豪雨」と命名されたこの平成最悪の水害の被害は甚大で、現在もまだ復興は完了していない。そのような中で、手漉き和紙の地元である八女の方々には、たとえ少人数であってもご報告したい、という気持ちでギリギリの時間に決断した。

しかしながら、実際には地元八女の方々が予想を上回り大勢来館して下さった。三田村統之市長に代わってご挨拶して下さった石井稔郎総務部長をはじめ、市役所の職員の方々もたくさん参加していただき、心強い限りであった。



3. 第3回報告会（2018年12月19日）

公式の報告会としては最後の回を、久留米大学御井本館8階スカイラウンジAで行なった。本事業に寄付して下さった方を中心に、諸方面の方々にご出席いただき、筑後の伝統工芸の今後の展望なども忌憚なく論議することができた。

終了後の懇親会も、和やかな中で地元筑後をめぐっての参加者の熱のこもった話が行き交い、異分野の方々が、筑後を語る貴重な交流の場となった。



第3回報告会後の懇親会にて（2018年12月19日）

4. その他

- 1) 「日本比較文学会九州支部会報」web 版に報告記事掲載 (2018 年度) 狩野 啓子
- 2) 「絢トークライブ in 久留米シティプラザ」でコーディネーターを務める
(2018 年 10 月 17 日) 狩野 啓子
- 3) 「久留米大学文学部同窓会誌」報告記事掲載 (2018 年 11 月) 狩野 啓子
- 4) 和紙文化研究会で口頭発表「ローマとフィレンツェにおける八女手漉き和紙の紹介」
(2019 年 2 月 16 日) 狩野 啓子・矢野 英子
- 5) 筑紫野市民大学で講演「2018 年 5 月イタリア事業報告」(2019 年 3 月 4 日) 狩野 啓子

以上が、帰国後の主要な事業報告である。

おわりに

久留米大学比較文化研究所 文化財保存科学研究部会
部会長 原口 雅浩

本報告書は、久留米大学比較文化研究所の文化財保存科学研究部会が 2018 年 5 月に行なったイタリア事業をとりまとめたものです。

本研究部会は、文化財保存を科学的に研究することと筑後地域の伝統工芸を結びつけることを目的に 2007 年に発足し、これまで、クララ研究、八女手漉き和紙研究、久留米絣・藍染め研究、クールジャパンの活動、九州国立博物館との連携等の活動を行なってきました。その集大成として、国際交流基金の助成を受け、5 月 15 日にローマのローマ日本文化会館で、筑後の伝統工芸を紹介するワークショップ、八女和紙の手漉きのデモンストレーション、久留米絣の展示と解説、筑後の伝統工芸品の展示と解説、八女伝統工芸館伝統工芸パネル解説、八女手漉き和紙と久留米絣の動画（イタリア語字幕）放映、八女和紙による文化財の修復や久留米絣の天然藍による防虫・防菌効果などの価値について PR を行ない、5 月 16 日から 18 日にかけて、フィレンツェで開催された文化遺産・保存国際学会（Heri-Tech）に参加し、八女手漉き和紙と久留米絣の動画放映、作品展示・解説を行いました。

今回のイタリアでの 2 大事業が実現し成功裏に終わることができたのは、国際交流基金助成に採択されたことも大きな要因ですが、それと同時に、支援者からの寄付、関係自治体（八女市・久留米市・うきは市）と久留米大学の支援協力があったからこそです。部会を代表しまして、深く感謝申し上げます。

さらに、ローマ日本文化会館と秋山信茂氏のご協力によりローマで八女和紙紙漉きの実演が可能となり、八女和紙、久留米絣それぞれの制作者が現地で実演することができました。また、博物館コーディネーターのイヴァーノ・フランカヴィラ氏には、イタリア事業全体の企画や展示ブースデザインに、通訳の鶴巻美砂子氏には、イタリア語通訳ならびに DVD 字幕作成にご協力を頂きました。重ねて、お礼申し上げます。